信州大学 SHINSHU UNIVERSITY | 教育学部 附属長野小学校

２年１組

今日もいっしょにすごそうね、アヒルのツムピー

ツムピーのうた

いよいよ、来週は音楽会です。２年１組の子どもたちが大好きな「ツムピーのうた」。曲作りの時、この、「ツムピーのうた」にどんな思いをのせたいか、話し合いました。子どもたちから出てきたたくさんの言葉は、「ありがとう」でした。

わたしたちのところに来てくれてありがとう。　いっぱいごはんを食べてくれてありがとう。　いっぱいうんちをしてくれてありがとう。　かわいい気持ちにしてくれてありがとう。　元気でいてくれてありがとう。　一緒におさんぽしてくれてありがとう。　ビニール手袋を飲み込んでも生きててくれてありがとう。　いつもみんなを教室で待っていてくれてありがとう。　薬を飲んでくれてありがとう。　一緒にいてくれてありがとう。　運動会で応援してくれてありがとう。　一緒に大池で泳いでくれてありがとう。　わたしたちの作った小屋に入ってくれてありがとう。　鳥インフルエンザにならないでいてくれてありがとう。　ぼくたちを学ばせてくれてありがとう。　毎日生きてくれてありがとう。

「だって、一生懸命作ったごはん食べてくれて嬉しかったから」、「だってさ、朝学校に来るとツムピー水道のところで待っててくれるじゃん」と語る子どもたち。「だってさ」と語る姿から、１つ１つの「ありがとう」には、その子が今まで見てきたツムピーや、ツムピーとわたしのくらしが込められているのだなと感じました。

そんな、ツムピーとの今までの暮らしや、思いがたくさん詰まった「ツムピーのうた」を、音楽の長田理玖先生がとってもすてきな歌にしてくれました。

体を揺らしながら、のびのびと歌う子。友だちと輪になって、踊りながら歌う子。ツムピーの近くに寄り、撫でながら歌う子。「あ～楽しい！」「もう一回！」と言って、もっと歌いたくなる子。改めて、みんなで歌うことのできる嬉しさ、楽しさ、気持ちよさを感じている子どもたち。そんな空間で私も一緒に歌いながら、「なんて心地よくて、幸せな時間なんだろう」と感じています。

それで満足じゃん

アヒルのオスとメスの見分け方を知っていますか？尻尾の先がまとまり、真っすぐに伸びていたらメス、くるんとカールしていたらオス。雛のうちはすべて同じ形で、大人になるにつれて尻尾に変化が出てきます。

卵を産むメスのアヒルを迎えたいと願っていたため、特別にツムピーは雛のうちに性別を調べてもらい、メスだと言われていました。「いつ卵産んでくれるかな？」と、ツムピーが卵を産むことを楽しみにしていた子どもたち。しかし、冬休み頃からツムピーの尻尾の先は、少しずつカールし始めました。「寝ぐせかな？」「昨日はくるってしてたけど、今日は真っすぐ」と尻尾の先を気にするようになっていました。真っすぐな尻尾に戻らなくなったツムピーを見ながらも「最近は全然寝ぐせ直らないね」と、**オス**ではなく**寝ぐせ**と言い続ける子が多く、そんな子どもたちを前に、ツムピーがメスではないことを受け入れられないのではないかと不安に感じていました。今週はさらにカール

する羽が増え、ＥさんやＮさんは「ツムピー実はオスなんじゃないかな」と言いながら図鑑と見比べていました。そこで、アヒルに詳しい津村さんにも連絡し、「きっとオスだろう」と言われたことを子どもたちに伝えました。すると、「やっぱりオスになっちゃったの？」「メスだったら卵産んでくれたのに」「ツムピーに卵産んでほしかった」などと率直で正直な思いを伝えてくれました。「私たちにとっては、やっぱりメスがよかったなって思いはあるよね」と話すと、「ツムピーにとってはなんか、、、」とつぶやくＤさん。ツムピーの思いを考え始めたＤさんをきっかけに、子どもたちが語り始めました。

Ｓさん：生まれてきてさ、もうオスってことは変えられないし、ツムピーの人生はもうオスで、メスにはなれないけど、僕たちがメスになってって言ってもツムピーがなんかかわいそう。「オスじゃダメなの？」ってツムピー思うんじゃない。
ツムピーが来てくれただけで嬉しかったでしょ。
Ｋさん：確かに！
Ｄさん：それで満足じゃん。僕はオスでも僕たちのところに来てくれただけで満足。
Ｓさん：そう、ツムピーが来てくれただけで良かったし、それにさ、違うメスが産んでくれた卵でも、ツムピーの子どもにはツムピーが残ってるでしょ。ツムピーのやってたこととかツムピーの癖とか大好物とか子どもには残ってると思うから。
Ｒさん：血はつながってる。
Ａさん：あのさ、ツムピーさ、ここまで生きてくれてるだけで満足。　　つづく…

Ｓさん、Ｄさん、Ａさんの「ツムピーが来てくれただけで満足」「ツムピーがここまで生きてくれただけで満足」という言葉や、それを聞いて、うんうんと頷いている子どもたちを前に、とても温かい気持ちになりました。卵を産んでくれるメスのツムピーだから満足なのではなく、ツムピーがツムピーであることをそのまま受け止めようとし、ツムピーがここに居てくれること、ただそれだけで満足だと言っているように感じました。子どもたちと話しながら、私は子どもたちとの学びのためにと、ツムピーを自分の都合で見ていなかったかと反省しました。そして、目の前にいるツムピーの大切さ、一緒に過ごせていることのありがたさを改めて感じました。

小屋のお引越し

アヒルは春と秋に換羽期で羽がたくさん抜けます。ツムピーも３月に入る２日前から羽が抜け始めました。「どうしてツムピーはもうすぐ３月が来るって分かるの？」「ツムピーカレンダーだ！春が来るよ！って教えてくれてる」と話す子どもたち。ツムピーも春に向けて体の準備を始めましたが、私たちも、春からの新しい小屋づくりが始まっています。

どこに引っ越すのか、場所決めのときに子どもたちから出てきた条件は、日当たりの良さ・水道の近く・３年１組の教室から見える・平らな地面・大池に行きやすいでした。この条件の１つ１つは、「日当たりがよくないと寒くてまたお腹が痛くなっちゃう」「池掃除は水道が近くないと大変」と、どれも今までのツムピーとのくらしの中での気づきが根拠となっていました。条件のそろう場所はどこか、自然体験園内のいろんな場所を比較し、シーソーの横に新しい小屋を建てることを決めました。

２年生になって２回目の小屋づくりですが、８月９月の小屋づくりと違うなと感じることがあります。それは、「先生、何していいか分かんない」と聞きにくる子がいないことです。小屋から板を外す子、板の釘を抜く子、板を新しい小屋に運ぶ子、運ばれた板を種類別に分類する子、板をきれいに並べる子、穴を掘る子、掘った穴からツムピーが食べるミミズを集める子、など他にもたくさん、自分にできることは何か、自分がやりたいことは何かを考えて動き出す子どもたち。毎日のツムピーとのおさんぽの時間を積み重ねる中で、「今日はツムピーと何しよう」「ツムピーのために何ができるかな」と考えて動いてきたことが、小屋づくりでも自然と自分の役割を見つけ動き出すことに繋がっているのではないかと思いました。「新しい小屋にはツムピーの家族も住むかもしれないね」と話しながら板を運ぶＹさん。自分たちが作る小屋で、ツムピーがどんな風に過ごすのか、想像しながら新しい小屋づくりに向かっています。